

## かき筏養殖実態調査(1959-60年)

誌名	広島県水産試験場研究報告
ISSN	03876039
著者	楠木, 豊 浜井, 正章
巻/号	18号
掲載ページ	p. 35-45
発行年月	1994年3月

# かき筏養殖実態調査（1959～60年）

楠木 豊・浜井正章

Oyster Raft Culture in Hiroshima in 1959-1960

Yutaka KUSUKI and Masaaki HAMAI

広島県のかき生産量は、1952年頃から筏式養殖の普及によって急速に伸び始めた。農林統計によると、1956年には約7,500トンの生産を挙げ、全国生産量の約44%を占め、1957年には9,986トンの生産で、全国生産量の約50%に達した。

しかし急速な増産によって市場にかきがあふれ、かきの価格はむしろ低下気味であった。当時の主な出荷先であった大阪市中央卸売場内の大阪淡水魚貝株式会社でみると、1kg当りの価格は、1954年121円、1955年114円、1956年113円、1957年107円と年々下がっていた<sup>1)</sup>。それで広島県では、「現在の広島かきは量こそ全国の半数以上を生産するも近年は従来からの広島かきの名声を落とすのみであり、全国の主要市場よりも品質低下の声も大きくなりつつある。」として、かき生産量の増加よりは品質の良いかきを作ろうとする、品質改善の運動を起こした<sup>1)</sup>。その具体策として、密殖を避けて品質向上を図るため、筏の垂下連数を3.3㎡（1坪）当り8～10本とするよう訴えている<sup>1)</sup>。すなわち当時の標準の大きさの筏132.2㎡（40坪）では320～400本とするように求めている。

このような背景のもとに、かき養殖の実態を調査することとなった。この調査結果は、筏によるかき養殖漁場が拡大し始めた頃のかき養殖の実態を知る上で重要であると考えられるので、ここに取り纏め、参考に供したいと思う。

## 方 法

調査はかき成育の極めて良好な佐伯郡廿日市町地御前地先のかき養殖場と、かき成育があまり良くない佐伯郡能美町深江の沖の島北側のかき養殖漁場において、漁場の行使状況を調査した（図1）。

地御前地先養殖場では1959年12月から1960年3月までの4ヶ月間、毎月1回調査した。深江の養殖場では1959年10月と1960年1月から3月までの毎月1回調査した。調査では、かき養殖漁場の設置筏台数を調査した。そして各筏の横竹数と、1本の横竹に垂下されているかきの連数を調べた。次いで垂下されているかきの養殖歴（1年生かきと2年生かきとの別）を調べた。また調査時に、取り上げ中のかきの垂下連1本をそのまま買い取り、この1本に付着しているかきをすべて剥き身して、垂下連1本の生肉重量を測定した。

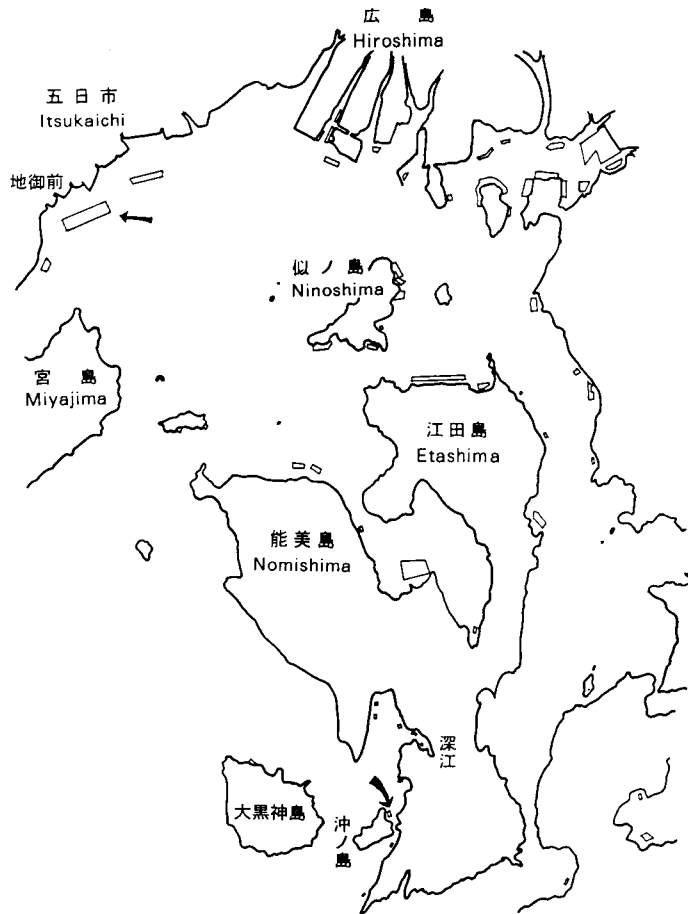


図1. 調査養殖漁場（矢印）

## 結 果

**地御前地先** この漁場には筏が23列配置されていた（図1）。1列には4台の筏が連結されるのが一般的なので、92台の筏の収容が可能である。

**筏台数と総垂下連数** 12月2日の調査では、筏台数91台であり、2年生かきは21台、1年生かき56台、2年生かきと1年生かきとが混ざって垂下されていた筏（混合養殖）14台であった。このうち取り上げ中の筏は4台のみであり、残る87台は連が完全に垂下されていた（表1）。そして総垂下連数は58,536本であった（表2）。総垂下連数のうち2年生かきは約3割を占めていたので、ここでの2年生かきと1年生かきとの養殖割合は3：7であったといえる。1月になると2年生かきは取り上げられて、残っていたのは6台のみとなっていた。1年生かきは82台と、12月の調査時の56台より26台も増えていた。混合吊りは6台となり、12月の14台より8台も減っている。混合吊りの場合には、2年生かきを取り上げられて1年生かきのみが残った筏もあると考えられる。このような筏は、1月には1年生かき筏として計数されていると考えられる。しかし1年生かき筏と混合吊り筏とを合計した筏台数は12月に70台、1月には88台と18台も増えており、

表 1. 地御前地先のかき筏台数

		1959年 12月2日	1960年 1月13日	2月1日	3月10日
2年生かき	全部垂下	19	4	0	0
	取り上げ中	2	2	0	0
	(小計)	(21)	(6)	(0)	(0)
1年生かき	全部垂下	55	59	42	11
	取り上げ中	1	23	41	53
	(小計)	(56)	(82)	(83)	(64)
混合吊り	全部垂下	13	0	0	0
	取り上げ中	1	6	3	0
	(小計)	(14)	(6)	(3)	(0)
新2年生かき	全部垂下	0	0	5	14
	取り上げ中	0	0	1	8
	(小計)	(0)	(0)	(6)	(22)
合 計	全部垂下	87	63	47	25
	取り上げ中	4	31	45	61
	(計)	(91)	(94)	(92)	(86)

表 2. 地御前地先養殖漁場の総垂下連数

		12月2日	1月13日	2月1日	3月10日
2年生かき		17,253	4,080	0	0
1年生かき		41,283	44,827	38,396	19,575
新2年生かき		0	0	3,840	10,897
合 計		58,536	48,907	42,236	30,472

1年生かき筏が他地区から運び込まれたことを示している。垂下連数で見ると、2年生かきはほとんど取り上げられて全垂下連数の約1割となっていた。1年生かきは、筏台数は増えたが、取り上げ中の筏が多くなったので、垂下されている連数は12月とあまり変わらない44,827本であった。結局取り上げられた2年生かきの連数だけ減り、総垂下連数は48,907本と、12月に比べて約1万本減っている。2月1日の調査では2年生かき筏は無かった。1年生かき筏は前月とほぼ同じ台数の83台であったが、取り上げ中の筏が半分の41台となっていた。この頃から新たに2年生かきの移殖が始まり、6台が垂下されていた。垂下連数で見ると、残っていた2年生かき約4,000本は全部取り上げられているが、新たに2年生かき用の種苗の垂下が約4,000本あり、結局1年生かきの取り上げられた約6,500本だけ総垂下連数は減っている。しかし実際の取り上げ連数は、他地区から運び込まれた筏があるので、この連数より多いはずである。

3月10日には1年生かきも大部分が取り上げ中であり、筏台数も64台に減っている。一方新2年生かき筏が6台から22台に増えていた。垂下連数で見ると、1年生かきは2月の調査時の約半分の2万本となっているが、2年生かき用種苗が約7,000本新たに垂下されており、総垂下連数

は30,472本で、12月に垂下されていた約6万本の半分となっていた。

**1台当り垂下連数** 筏1台に垂下されている連数を調べるには、かきがほとんど取り上げられていない12月の調査が最も適している。1台の筏に1年生かき、2年生かき、この両方が垂下されている混合吊りの3つに分けて、それぞれの垂下連数の分布をみた。12月の筏台数91台のうち、取り上げ中の4台を除く87台について、筏1台の総垂下連数の階級を50本間隔でその分布を

表3. 垂下連数別筏台数（地御前地先，12月調査）

垂下連数	2年生かき	1年生かき	混合吊り	計
501～550	1	8		9
551～600	4	16	1	21
601～650	8	13	6	27
651～700	2	10	1	13
701～750		3		3
751～800	2	2		4
801～850	2	1	1	3
851～900		1		2
901～950			1	0
951～1000		1	2	2
1001～1050				2
1051～1100			1	0
1101～1150				1
筏台数	19	55	13	87
垂下連数計	12425	34896	9921	57242
1台平均連数	653.9	634.5	763.2	658.0

示したのが表3である。最も少ないのが504本、最も多いのが1,120本であった。平均垂下連数は、全筏の平均で658本、2年生かき654本、1年生かき634本、混合吊り763本と、混合吊りが最も垂下連数が多い。700本以下の筏が70台と多くて、約80%を占めている。垂下連数700本以上吊っている筏は1年生かき8台、2年生かき4台、混合吊り5台の計17台である。1筏に1,000本以上と特に多く垂下されているのは混合養殖のみで、2台分に近い垂下連数となっている。

**筏の横竹数** 筏の横竹の数は筏によって大きく異なっている。最小31本から最大42本までであるが、35本から40本までの筏が多く、これらの筏で全筏台数の約80%を占めていた。このうち横竹の数が35本、36本、38本、40本の4種類の筏が多く、奇数の37本、39本の筏は少なかった（表4）。平均横竹数は36.9本であった。

表4. 地御前地先のかき筏の横竹の数の分布（12月調査）

横竹数	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	計
筏台数	1	1	2	7	18	18	4	17	1	13	2	3	87
(%)		4.6		8.0	20.7	20.7	24.1		16.1		5.7		99.9

**横竹1本への垂下連数** 横竹1本に吊られているかきの連数は、混合吊りの場合は特別に多く吊られていることがあるので除き、2年生かき筏19台と1年生かき筏55台の計74台について、横竹1本当りの垂下連数を調べた。

筏74台の横竹1本へのかき垂下連数の総平均は17.4本で、うち2年生かき19台の垂下連数の平均は17.9本であった。1年生かき55台の垂下連数の平均は17.2本で、2年生かきと大差なかった。

表5. 横竹の数と横竹1本の垂下連数に対応する筏台数 (地御前地先)

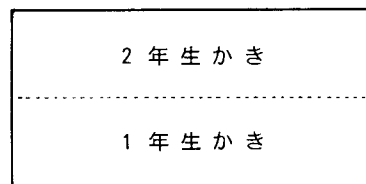
横竹の数	横竹1本の垂下連数								
	14	16	18	20	22	24	26	28	
32								1	1
33			1						1
34		1		1	1	1(1)			4(1)
35		3(2)	5(2)	4(2)		2(1)		1	15(7)
36	1	11(1)	3		1(1)				16(2)
37	1	1(1)	2						4(1)
38	4	6(3)	3	2(1)					15(4)
39				1					1
40	3(1)	7(3)	2						12(4)
41	1	1							2
42	2	1							3
計	12(1)	31(10)	16(2)	8(3)	2(1)	3(2)		2	74(19)

注：括弧内の数値は、筏台数のうちの2年生かき筏の台数

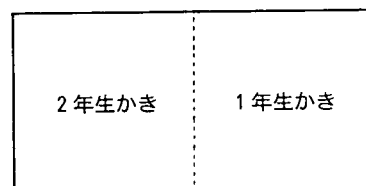
横竹の本数は、筏74台の総平均は37.1本であった。混合吊りも含めた平均横竹数36.9本(表4)より僅かに多かった。このうち2年生かきは36.8本、1年生かき37.2本で大差なかった。したがって筏1台当りの垂下連数は、総平均で645.5本(37.1本×17.4=645.5本)であった。このうち2年生かきは658.7本(36.8本×17.9=658.7本)、1年生かき639.8本(37.2本×17.2=639.8本)で、わずかに2年生かきの方が多かった。平均横竹1本の平均垂下連数から算出した1台当り平均垂下連数は、実際に垂下されている連数から算出した平均垂下連数(表3)より約5本ほど多くなっている。

混合吊りの吊り方を見ると、図2に示したように、横竹1本の半分に2年生かきを、残る半分に1年生かきを垂下している筏と、横竹1本には2年生かきか1年生かきのいずれかを垂下している筏で、前者を横型、後者を縦型と呼ぶことにする。12月の混合吊り筏14台のうち横型7台、縦型7台と半々であった。

横型の筏7台のうち、取り上げ中の1台を除く6台



A. 横型



B. 縦型

図2. 混合吊り養殖における2年生かきと1年生かきの吊り方

について、横竹1本の垂下連数をみると、3台は16～18本の垂下であるが、残る3台は1年生かきだけで18本も垂下されている（表6）。これは2年生かきを取り上げた後、1年生かきだけで1台にするもので、2台吊りと言われている。したがって筏1台の垂下連数も1,000本以上と多い。

表6. 混合吊り筏（横型）の垂下連数（地御前地先，12月調査）

横竹本数	横竹1本の垂下連数			筏1台の垂下本数		
	2年生	1年生	計	2年生	1年生	計
35	4	14	18	140	490	630
38	2	14	16	76	532	608
38	10	6	16	380	228	608
34	12	18	30	408	612	1,020
36	10	18	28	360	648	1,008
40	10	18	28	400	720	1,120

縦型の1本当り垂下連数は、2年生かきは19本を吊っている1台を除いて15～16本と普通の垂下連数である。しかし1年生かきは2年生かきより垂下連数は多く、横竹1本に20本、22本吊っている筏と、30本以上と特に多く吊っているものとに分かれている。横竹1本当り垂下連数が30本以上のものは、平均垂下連数約17本の約2倍となっている。

表7. 混合吊り筏（縦型）の垂下連数（地御前地先，12月調査）

2年生かき			1年生かき			筏1台の垂下連数
1本当り垂下連数	横竹本数	垂下連数	1本当り垂下連数	横竹本数	垂下連数	
16	24	384	20	9	180	564
15	21	315	22	13	286	601
18	14	252	30	21	630	882
15	18	270	32	11	352	622
19	18	342	34	18	612	954
16	20	320	14 36	8	112	648
				6	216	
16	23	368	36	8	288	656

垂下連1本当りかき生産量

2年生かきは12月，1月とも大差なく，垂下連1本当り平均で3.2kg余であった。1年生かきは，12月でも平均約3.5kgと，2年生かきと大差なく，1月以後では5kgから9kgにもなり，1～3月平均

表8. 垂下連1本のむき身重量（kg）（地御前地先）

月	1959	1960		
	12	1	2	3
2年生かき	3.33	3.30		
(平均)	2.87 (3.10)	(3.30)		
1年生かき	4.61	6.61	5.64	5.10
	2.42	7.75	4.59	7.20
	3.45	6.95	8.95	6.80
		6.56	4.73	7.60
(平均)	7.30 (3.49)	(7.03)	(5.98)	(6.68)

でも約6.5 kgと、2年生かきよりかなり多かった。

2年生かきの垂下連数は653.9本であるから、1台当たりかきむき身生産量は $653.91 \times 3.2\text{kg} = 2.1$ トンである。1年生かきは634.5本であるから、1本当たり6.5 kgとすると約4.1トンとなり、2年生かきの2倍の生産量となる。

**深江地先** 沖の島北側に設置されていたかき筏について調査を行った(図1)。

**筏台数と総垂下連数** ここでは1959年10月と、翌1960年1～3月の4回調査を行った。10月の調査ではこの養殖漁場に49台のかき筏が設置されており、このうち2年生かきは44台、1年生かき5台であり、大部分が2年生かきであった。また2年生かき44台のうちには真珠養殖との混合養殖が5台あり、筏の中央部にアコヤガイ、両側にかきが垂下されていた(表9)。1月にな

表9. 深江地先かき筏台数

		10月 日	1月7日	2月19日	3月15日
2年生かき	全部垂下	38	7	0	0
	取り上げ中	1	14	6	0
	アコヤガイとの 混合養殖	5	0	0	0
	(小計)	(44)	(21)	(6)	(0)
1年生かき	全部垂下	5	6	3	0
	取り上げ中	0	0	6	12
	(小計)	(5)	(6)	(9)	(12)
新2年生かき	全部垂下	0	0	9	14
	一部垂下	0	0	0	0
	(小計)	(0)	(0)	(9)	(14)
合 計	全部垂下	43	13	12	14
	一部垂下	6	14	12	12
	(合計)	(49)	(27)	(24)	(26)

ると2年生かきのうち筏に全部垂下されているのは7台のみとなり、取り上げ中の14台を含めても21台と、10月の調査時点での半分の台数となっていた。1年生かきは1台増えて6台となっていた。そして、かきが垂下されていた筏は27台で、10月の49台の約半分に減っている。2月になると、2年生かきは取り上げ中のもの6台のみとなる。1年生かきは、全部垂下されているもの3台、取り上げ中のもの6台の計9台と、1月の調査時の筏台数より増えており、ここでも筏が他地区から曳航されてきたことを示している。また新たに2年生かきの垂下が開始され、9台が垂下されていた。3月には2年生かきは無く、1年生かきも取り上げ中の筏12台のみとなる。新たに垂下された2年生かきは14台と増加していた。かきが垂下されていた筏は26台で、1月以後、あまりかき筏台数に変化はみられなかった。

垂下連数は、10月に2年生かき16,279本、1年生かき2,362本、計18,641本であった。1月には2年生かきが約1万本取り上げられており、残っていたのが5,145本、1年生かきは10月とあまり変わらず2,400本、計7,545で、10月の調査時に比べて約40%に減っている。2月には2



年生かき 1,421 本と減っているが、1年生かきは2,104本であまり変わらず、新2年生かきの移殖垂下が4,188本あったため、合計7,713本と、1月と大差無い。3月には2年生かきは無くな

表10. 深江漁場のかき垂下連数の変化

	10月	1月	2月	3月
2年生かき	16,279	5,145	1,421	0
1年生かき	2,362	2,400	2,104	1,253
新2年生かき	0	0	4,188	6,349
合計	18,641	7,545	7,713	7,602

り、1年生かきも1,253本と、2月の半分に減っていたが、新2年生かきが6,349本と増えているため、総垂下連数は7,602本と2月とあまり変わらない。この結果この養殖漁場のかき垂下連数は10月約19,000本であったが、1～3月は約7,600本とあまり変わっていなかった。

**筏1台へのかき垂下連数** 最もよくかきが垂下されていた10月の調査で、取り上げ中の筏1台とアコヤガイとの混合養殖の5台、計6台を除いた43台について、かき筏の横竹の数と、横竹1本へのかき垂下連数を表11にまとめて示した。

表11. 筏1台の横竹数と、横竹1本のかき垂下連数の分布

横竹数	横竹1本のかき垂下連数					計 (うち1年生かき)
	10	11	12	13	14	
30			1		1	2
31						0
32		1		1	1 (1)	3 (1)
33			3	1		4
34		1	4	1		6
35	5	11	3	3	3 (3)	25 (3)
36		1				1
37			1 (1)			1 (1)
38		1				1
計	5	15	12 (1)	6	5 (4)	43 (5)

注：括弧内の数字は、筏台数のうちの1年生かき筏の台数

横竹の数は30～38本にわたるが、35本の筏が43台のうち25台を占めており、つぎに34本の6台である。33～35本の筏台数でみると35台となり、全筏台数の約80%を占めている。このように当漁場のかき筏は、規格が大体似たようなものであることを示している。平均横竹数は34.4本であった。横竹1本へのかき垂下連数も10～14本と幅が狭く、そのうち11本と12本のもものがそれぞれ15台、12台と多く、合計27台で約60%を占めている。1年生かきは横竹1本に12本垂下のもものが1台、14本垂下のもものが4台と、2年生かきに比べると垂下連数がいくらか多い。横竹1本への平均垂下連数は、全筏では11.8本、このうち2年生かきは11.6本、1年生かきは13.6本となっている。

表12. 筏1台の垂下連数の分布

階級	筏台数
350 — 374	8
375 — 399	15
400 — 424	10
425 — 449	4
450 — 474	3
475 — 499	3

これから筏1台当り垂下連数を見ると350～490本の範囲にあり、25本間隔でまとめると、表12の通り、424本以下のものが33台と多く、425本以上の筏は僅かに10台に過ぎなかった。これから平均1台当り垂下連数を算出すると405.0本となった。

**垂下連1本のかき生産量** かき垂下連1本を買い取り、全部のかきをむき身した結果、1本当りの生肉重量は、平均して、2年生かきが12月2.93kg、1月3.41kg、2月2.75kgで、約3kgであった。1年生かきは12月0.52kg、1月1.68kg、2月2.75kg、3月4.20kgと次第に多くなり、出荷される2～3月には3kg以上となっている。

表13. 垂下連1本のかきむき身生産量 (kg) (深江地先)

	1959年	1960年		
	12月2日	1月15日	2月22日	
2年生かき	4.34	3.64	2.04	
	2.04	2.70	3.46	
	2.42	3.90		
(平均)	(2.93)	(3.41)	(2.75)	
1年生かき	0.52	1.68	2.75	4.90
				4.69
				3.00
(平均)	(0.52)	(1.68)	(2.75)	(4.20)

垂下連数は平均405本なので、筏1台当りむき身生産量は3kg×405本=1.2トンである。3月の1年生かきはこれより多く、4～5kg×405本=1.6～2.0トンと推定された。

## 考 察

当時のかき筏養殖は、現在行われている方法とは異なるので、先ずその点を見ておく。筏の大きさは9.1m×14.5m≒132㎡(5間×8間=40坪)であった。この4台の筏を連結して1列としていた。

養殖方法は1年生かきと2年生かきとがあり、1年生かきは6月下旬から7月に採苗され、約1カ月間抑制の後筏に垂下された。2年生かきは7月に採苗し、抑制していた種苗を、早いものでは12月から筏に垂下されるものもあったが、大部分は翌年の3～4月に筏に垂下された。ムラサキイガイの付着は、1963年の厳冬以来急激に繁殖してかきに大きな被害を与えることになったが<sup>2)</sup>、当時はそれほど付着は多くなかったため、冬の間から4月にかけて移植作業が行われていた。

地御前と深江の養殖を見ると、いろいろな面で対照的である。地御前では1年生かきが約7割と多いが、深江では約9割が2年生かきである。取り上げ出荷は、地御前では1月13日の調査では2年生かきが約75%取り上げられていることから、主に12月に2年生かきが出荷されていたことがわかる。一方1年生かきは、1月の調査で、1年生かき筏82台のうち取り上げ中の筏台数が23台となっており、1月以降1年生かきが主に出荷されていたようである。

また12月から1月にかけて2年生かきの筏台数が、取り上げによって21台から6台に減少しているのに対して、1年生かきは56台から82台に増加しており（表2）、増加した1年生かき筏は他地区から曳航されてきていることがわかる。

これに対して深江では、1月7日の調査で2年生かきだけが取り上げられており、2月19日の調査では1年生かきも取り上げられていることから、1月までは2年生かき、2月は2年生かきと1年生かきの両方が取り上げられていたものと考えられる。深江ではかきの成育が悪いので2年生かき養殖が主体であり、2年生かきの出荷も2月頃まで行われており、1年生かきの主な出荷は3月になってから行われていたと考えられる。

新しい2年生かきの移植は、地御前では、1月13日の調査では見られなかったが、2月1日の調査で既に5台が垂下を完了しており、これからみると1月下旬から移植が始まったと考えられる。深江では、1月7日の調査では新2年生かきの移植は無いが、2月19日の調査では9台が移植を完了しており、やはり1月下旬頃から移植が行われていたのであろう。3月の調査では、新しい2年生かきは、地御前では垂下完了したもの14台、垂下中のもの8台、計22台であり、筏台数約90台のうちの約25%となっている。深江では14台が移植されており、筏台数49台の約30%となっており、地御前と似た数字となっている。

筏1台のかき垂下連数は、広島県は標準の筏132.2㎡（40坪）の筏では320～400本とするよう指導していた<sup>1)</sup>。深江では424本以下の筏が33台と、全筏台数43台の約77%を占めており、ほぼ県の指導した本数になっている。最大の垂下連数も500本以下であった。

一方地御前の筏の垂下連数は、最も少ないものでも504本であり、深江の最も多く垂下している筏よりも多い。平均垂下連数は656本で、標準として指導している400本より1.6倍も多く垂下されていた。筏1台に最も多く垂下されていたのが1,120本で、標準として指導していた連数の2.8倍も多く垂下されていた。地御前地先では、かきの成育が良いというのでかなり密に垂下していたわけである。横竹の本数は地御前37本、深江34本と、筏の大きさはあまり変わらない。したがって筏1台の垂下連数の違いは、横竹1本への垂下連数の違いである。横竹1本への垂下連数は地御前17本、深江12本で、5本多く垂下されていた。地御前で1台への垂下連数が1,000本以上と多い筏は、横竹1本への垂下連数が多くて、1台の筏で2台分の垂下連数となっている。いわゆる2台吊りが既に行われていたわけである。このように、かきの成育が良いというので多く垂下していたことが、その後のかきの成育低下、漁場の老化を招くことになったものである。余裕のある養殖量にする必要が痛感される。

垂下連1本当りのむき身生産量は、2年生かきは約3kgで、両地区による差はあまり無い。しかし1年生かきは深江地区が約4kgなのに対して、地御前地先では6.5kgと、かなり多い。深江地先では、筏の垂下連数を少なくして成育を良くしようとしていた。2年生かきは垂下期間が長いので地御前地先と変わらぬ生産量となっているが、1年生かきは垂下期間が短くて、垂下連数を少なくしただけでは地御前の成長には追いつけなかったことを示している。

垂下連1本当たりむき身生産量と垂下連数とから、両養殖漁場の筏1台当たり平均かき生産量を推

定してみよう。2年生かきの垂下連1本当りのむき身生産量は両地区であまり変わらないが、垂下連数が深江の方が少ないので、筏1台の生産量は、地御前の2.09トンの半分の1.22トンに過ぎない(表14)。1年生かきは、垂下連1本当りむき身生産量が深江の4.2kgに対して、地御前は

表14. 地御前と深江地先の筏1台当り生産量の比較

		地 御 前	深 江
2 年 生 か き	垂下連1本の生産量	3.2 kg	3.0 kg
	平均垂下連数	654	405
	筏1台当り生産数	2.09トン	1.22トン
	筏台数	21	39
1 年 生 か き	垂下連1本の生産量	6.5 kg	4.2 kg
	平均垂下連数	634	405
	筏1台当り生産数	4.12トン	1.70トン
	筏台数	56	5
合 計 筏 台 数		77	44
平均筏1台当り生産量		3.57トン	1.27トン

6.5 kgと多く、しかも垂下連数が多いので、筏1台当りのむき身生産量は、地御前の4.12トンに対して、深江は1.70トンと、地御前の約40%の生産量に過ぎない。

養殖漁場に設置されている筏台数で平均すると、地御前は生産量の多い1年生かきが多く、深江は生産量の少ない2年生かきが多いので、1台当り平均生産量は、地御前3.57トン、深江1.27トンと大きな差がみられた。

## 文 献

1. 広島県・広島市・広島かき連合漁業協同組合：昭和33年度かき対策関係資料。1989.
2. 楠木豊：広島湾におけるムラサキイガイの付着状況。水産増殖，16(1)，15-18，1968.